

—巻頭エッセイ—

## 地質ニュースの役割

有田正史<sup>1)</sup>

地質ニュースは本号で通巻501号となります。年に直しますと42年目を迎えたこととなります。初刊のころ、私は中学生で山口県の秋吉台の近くの化石の宝庫、大嶺炭田地域で化石採取に明け暮れていたころです。

その後、高知大学に入学しましたが、その当時、地学教室の先生は沢村武雄先生と甲藤次郎先生のお二人のみで、地質学の専門分野のほとんどすべてを教えておられました。今から考えますと実践地質学時代のスーパーマンみたいな先生です。甲藤先生の指導で室戸半島の地質の研究をすることになりました。室戸の海岸に調査に行きましたが、単調な砂岩と泥岩の互層しかなく、砂岩には変な模様があるのみで、何が面白いのかさっぱりでした。大学の図書室で地質ニュースに出会いました。その中に、堆積構造についての記事があり大変勉強になり、その後の調査を面白く進展させることができました。同じ様な経験をした人も多いと思います。

現在の地質ニュースはニュース性を重んじるため、仕方がないところもありますが、昔のものと比べると非常に高度で、学際的だということです。かなりの地質学的素養がなければ理解できないような記事が多いような気がします。いまの地質ニュースからは昔、私が受けたような恩恵は得られそうにありません。教養講座的の記事も必要でしょう。

現在、大学の地質学教室は改組が行われ、次第に地質学の基礎である野外地質(純正地質学)の重要性が忘れられてきているように思われます。その証拠として、地質コンサルタント関係者からは地質調査のできる学生がいけないとの悩みを聞きます。

地質学は地球の歴史の時間と空間において起った現象を解明し、現在に当てはめ、さらに未来を予測する学問であり、そのためには、野外で過去の記録を正確に読み取ることが必要だと思いますし、熟練

された地質屋以外にはできる技ではないのです。そのための方法論の糸口さえも、どこも教えないというなら純正地質学を实践してきた諸先輩の力を借りて、地質ニュースがページの一部をさいて、その任に当たってはどうかと思います。

現在の地質学は部分的現象の解明法については進歩を遂げているように思えますが、一方で、総論としての地質学そのものは道を踏み外しているのではないのでしょうか。

このような事態になっても何一つ世の中からの非難の声は起こりません。その理由は、現在の地質学が社会から遊離状態にあるからでしょう。我が国は地下資源を外国にほとんど依存しております。土木建築工事については、土木工学の進歩により、どのような地質のところにも構築可能のようです。このような時代の流れの中で、我が国では、地質学の重要性は忘れられていき、研究者は自分の城に閉じこもり、自らの滅亡を待っているのでしょう。

しかしながら、地球は今も生きており、時として身を震わし、くしゃみをします。この地球の気ままな行動は地震や火山噴火となって人々に被害を与えます。地下資源の問題にしても供給の予測が必要です。土木構築物についても本当に地質を軽視しても大丈夫なのでしょうか。地下水には異常がありませんか。地質屋の発言を必要とする状況は世の中にはまだまだたくさんあると思います。地質災害が発生した後で「実は……」というのは、終りにしましょう。

いまだ、地質学を老けこます時期ではないと思います。地質学を社会から遊離させた要因は地質学の重要性を社会生活と関連した啓蒙活動の努力を怠った地質屋自身の責任であろうと思います。

実学としての地質学を普及し、地質屋の後継者を産み出すことも地質ニュースの重要な役割だと考えます。

1) 地質調査所 海洋地質部

キーワード：地質ニュース、啓蒙活動